

社会に出てからが本当の勉強

土浦共同病院外科部長
東京医科歯科大臨床准教授

伊東 浩次氏 (高校35期)

1990年 東京医科歯科大医学部卒業、同大学第一外科入局
1999年 医学博士
2006年 東京医科歯科大肝胆膵外科助教
2009年 土浦協同病院外科
現在土浦協同病院外科部長、東京医科歯科大臨床准教授



立高生の皆様、はじめまして

私は現在、茨城県の総合病院で主に、肝臓、胆道、膵臓の外科を担当しています。高校の時は、歯学部希望でしたが、当時、担任の深澤先生に勧められ医学部に変更。一浪しましたが、翌年合格し、医師となりました。当時は必ずしも医師になりたいと強く思っていたわけではありませんが、現在は医学の道を勧めて頂いた深澤先生には本当に感謝しています。

肝胆膵外科医として



Harvard大での研修時

皆さんは外科医というどのようなイメージをお持ちでしょうか。医龍やドクターX、白い巨塔などドラマでも取り上げられ、カッコいいですよね(私の病院でも時折、ドラマ撮影が行われています)。しかし現実はどうでしょう。若い時は、手術が上手くなりたくて、がむしゃらに定時手術でも夜中の緊急手術でもこなしていました。少し経つと、出血や合併症などの怖い経験し、少し工夫するようになり、40代半ばにしてやっと一人前(肝胆膵外科は手術も高難度で、指導者となるには15年～20年かかります)。今は母校から中堅の肝胆膵外科医(卒後10～13年目)が数名、修練医として派遣されています。

現在、50代半ばに差し掛かりましたが、目は老眼となり、8時間を超える長時間手術は体力的に少し厳しくなり、夜間の緊急手術は翌日の仕事に影響します。

本当に外科医としていい時期は40代後半から50代前半まで約10年弱。決して仕事としては割がいいとは言えません。ただ、大変だからこそ得られる達成感は、外科医ならではの。肝胆膵領域の癌は、全ての癌の中で一番予後不良(治療成績が悪い)で、どんなに難しい手術を成功させたとしても、術後1年、2年で患者様が再発してお亡くなりになってしまうことも多々あります。逆に術後5年、10年無再発で生きておられる方を外来で診察するときは本当に嬉しいものです。



医科歯科大の手術室にて

立高生へのエール

どんな仕事でも、ひとは生涯、勉強しなければなりません。医学では3年前の知識は時代遅れです。外科でも、ここ数年の間に腹腔鏡手術やロボット手術の進歩、また抗癌剤だけでなく分子標的薬、免疫治療といった新規薬剤の開発、新しい診断機器の導入など、自分をbrush upしなければ取り残されてしまいます。50代になっても毎日が勉強です。働き方改革が叫ばれる昨今、外科医の生活はこれとは全く真逆ですが、患者の命の前では働き方もへたくれもありません。在学生の皆さん、今は学校の勉強や大学受験がとても大変に思われていると思いますが、本当の勉強、学問は大学を卒業してからです。学生の中の勉強など糞食らえくらいの意気込みで正面突破してください。そして常に高い志をもって世のため、人のために尽くしてください。